

# 健康通信 しずおか

No.20

2014  
新春号1月

TRANSITION TO HEALTH (020)

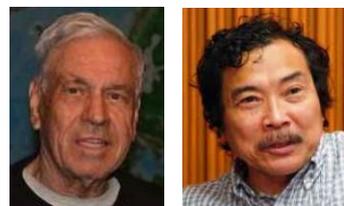
## 「早期発見」から「健康の創造」へ ①

### ～ 「自然療法」弾圧から「薬物療法」主流への歴史 ～

新年明けましておめでとうございます。今年も真の健康情報の提供に努めて参りたいと思います。

#### はじめに

医学・医療技術の目覚ましい進歩にもかかわらず、日本人は必ずしも健康であるとはいえず、平均寿命は延びたものの**病気は増え続けている**。一体何故でしょうか。また、昨年も健診（検診）・ガン検診の**不要論・有害論**やガン治療**批判本**が出版されていました。私は、これらの批判本の内容の8割から9割は支持せざるを得ないと考えています。その理由として、日本の**医療の行き詰まり**が半分、日本人の**健康意識の誤り**が半分と考えています。日本人の多くは、**自然治癒力を培う努力を怠り、現代医療を疑うことなく盲信し、薬に頼り過ぎている**ように思われます。そこで先ず、近代医療から現代医療への変遷の歴史について学ぶ必要があると考えます。**ユースタス・マリンス氏**（写真・左）の名著『医療殺戮』、**船瀬俊介氏**（写真・右）の数々の著書を参考にしながら、私の考えを述べさせていただきます。



#### かつて「5つの医学流派」があった

近代医学が成立する前のヨーロッパには5つの医学流派があり共存共栄していた（右表）。① **ナチュロパシー**は「**食事療法**」などを中心としたもので、古代ギリシアの医聖ヒポクラテスも「自然なものは体を癒す」と奨励していた。② **オステオパシー**は体の歪みを正すことで病気を治すカイロプラクティックや鍼灸、指圧、マッサージなど。③ **サイコパシー**は心の苦悩や不安などを取り除いて病気を癒す。瞑想、カウンセリングなど。「**病は気から**」で理にかなっている。④ **ホメオパシー**はホメオスターシスを増強する。**自然治癒力を高めるもの**。たとえば、発熱は治癒反応であり、解熱させずに更に高熱にすることで回復を早める。そして最後の⑤ **アロパシー**が**薬物療法**で、**現代医療の主流**である。「**薬物療法**」は、根治療法ではなく「**症状**」を「**病気**」と見なして改善しようと試みる「**対症療法**」である。ところが、「**症状**」とは本来、生体が正常な**元の状態**に戻ろうとする反応で、「**自然治癒力**」を働かせて治ろうとする「**治癒反応**」である。

#### 5つの医学流派

- ① ナチュロパシー（自然療法）
- ② オステオパシー（整体療法）
- ③ サイコパシー（心理療法）
- ④ ホメオパシー（同種療法）
- ⑤ アロパシー（薬物療法）

#### 症状とは・・・

「症状」≠「病気」  
「症状」＝「治癒反応」

#### 近代医学はドイツ医学“戦場の医学”に由来する

19世紀後半のヨーロッパは、クリミア戦争からドイツ統一までの間、戦争に次ぐ戦争の時代であった。そんな

公益財団法人 静岡県産業労働福祉協会

〒421-0113 静岡市駿河区下川原6丁目8番1号

TEL054(258)4855(代) FAX054(258)4403

http://www.kenshin-shizuoka.net

E-mail:info@kenshin-shizuoka.net

戦場では外科医療が急速に発達した。それは消毒、麻酔、手術の医学、つまり救命救急医療であった。したがって、近代医療の流れにある現代医療は、救命救急医療には極めて優れているが、残りの9割ほどを占める心臓病、糖尿病、脳卒中、高血圧などのいわゆる慢性疾患や癌にはお手上げの状態であった。それは、現代医学のルーツが“戦場の医学”“野戦病院の医学”であったため、いわゆる慢性疾患は治療の対象外であったのである。

「薬物療法」では、病気と見なされた「症状」が改善したように見えても実際には、「治療反応を止められた」私たちの生体では「病気が固定化」されてしまい、急性疾患が「慢性疾患」と化してしまうのである。

①ナチュロパシー、②オステオパシー、③サイコパシー、④ホメオパシーが自然治癒力を補助する療法であるのに対し、⑤「アロパシー（薬物療法）」は、自然治癒力を損なう「逆症療法」ともいえる。

## 現代医療の主流「薬物療法（アロパシー）」の欠陥

薬は基本的に“毒物”である。人に投与して生体が様々な生理的反射反応を起こす。都合の良い反射反応を主作用と考えて「血圧降下薬」や「コレステロール低下薬」などとして認可し、それ以外の「肝障害」や「横紋筋融解症」などといった都合の悪い反射反応を副作用として隠蔽する傾向がある。化学薬品である限り副作用のない薬はなく、急性期をしのぐ為に極少量を短期間使うのが基本で、漫然と使い続けるものではない。長期投与により、次第に効きが悪くなる「薬物耐性」や禁断症状を伴う「薬物依存」も起こり得る。このような「毒性」「耐性」「依存」という重大な問題を抱えた治療法が「薬物療法」で、現代医療の主流であり、自然治癒力を無視した対症療法だ。

## 医学界は自然療法を採用せず、患者を薬漬けにしてきた

自然の恵みは無限であり、安価で効果的な自然療法が可能であったが、儲けが少ないため当時の銀行家・石油産業が支配する医学界にとっては「自然療法は魅力がない」治療法であった。したがって医学界は化学薬品である新薬を開発してきた。ご存知のように製薬業界というものは石油産業から発生したものである。自然療法から石油由来の化学薬品＝新薬に切り替えが行われて以来、副作用として肝臓・心臓・腎臓・脳・中枢神経などが侵される例が多くなり、また、脳腫瘍の発生も新薬に依存する現代医学と深く関係しているといわれている。米国の或る製薬会社が、新薬のサンプルを服役中の囚人に飲ませたところ脳腫瘍などが多発したとの記録も残っている。

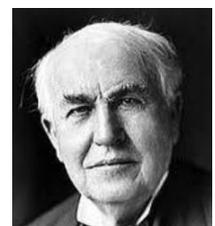
## アメリカにおける医学学校の改革（1913年～1914年）

1912年当時までのアメリカ人は世界一健康な国民であったといわれ、農場で作られた新鮮な食糧に恵まれていた。今で言ういわゆる有機農法で、食品添加物、農薬という言葉すらなかった。他の治療法を排除するために新しい医学学校の認可条件を定め、条件を満たさないとの理由で、自然療法を教えてきた医学学校をことごとく閉校に追い込んだ。そして大量の新薬を使用する現代医学しか教えない医学学校（のちの医科大学、大学医学部）だけを生き残らせた。癌の代替療法や自然療法には研究費をつけず、ことごとく弾圧してきた。当時の銀行家・石油産業支配者は、このようにして自然療法やホメオパシーを禁止し、新薬と外科手術に依存する現代医学を押し進めていった。

## 薬物療法中心になってから、アメリカ人の健康は悪化し続けてきた

ホメオパシーその他の自然療法が法律で禁じられたアメリカでは、国民の健康は「化学薬品＝新薬」に蝕まれ始め今日まで続いている。膨大な利益を伴って生産される新薬の副作用としての心臓麻痺は爆発的に増加し、脳溢血、脳腫瘍、免疫不全なども増加した。今日、アメリカ人が病む病気の大部分は変性疾患（degenerative diseases）で、これは間違った生活環境の選択、毒性物質、汚染された水、汚染食物によって長い時間をかけて進む病気である。現代人は、農薬、食品添加物、化学調味料などを通して大量の化学物質を食物から摂取させられている。また、ほとんどの医師は栄養に関する知識は皆無であり、医学部でも栄養学の教育をほとんど行なってこなかった。この20世紀初頭の急激な医療の変化の真只中を生き、病めるアメリカ人を目の当たりに見ていた

トーマス・エディソン（1847.2.11-1931.10.18）は“The doctor of the future will no longer treat the human frame with drugs, but rather will cure and prevent disease with nutrition”  
「未来の医師は、もはや人間の体を薬で治療することはなく、栄養で病気を治療し、また予防するであろう」という名言を残している。エディソンの言う“未来”



とは・・・それは“今でしょ”（笑）。 「日本の医師たちよ、早く目を覚まさない！」（丸山）

おわりに 健康意識に目覚め、自然治癒力を培い、現代医療を盲信せず、薬に頼らず、健康を創造しましょう。